

2011年という年は、誰にとっても忘れられない年になってしまった。とくに、祖国を遠く離れている私達にとっては、普段意識しないように心掛けていたその距離を思い知らされ、無力感に苛まれることも多かったのではないかな。個人的には、「このような状況の中で、音楽など、何になるであろう」と自虐的にもなった。

震災から1週間後、チューリヒ歌劇場のプレス担当者から、津波被災者のための慈善コンサートのお知らせを拡散させる手だてを相談されたのを皮切りに、日本人演奏家主催のチャリティーコンサートやチューリヒ・トーンハレでの3つのオーケストラの合同コンサートなど、心温まる企画の情報が、どんどん耳に入って来るようになった。この時ほど、演奏家稼業を廃業してしまったのが悔やまれたことはない。音楽を言葉で表現するという、ある意味で不可能な世界に入ってしまった私に出来る事を模索していた時に、当会報に何か書かないか、とお誘いを頂いた。これもきっと、何かのご縁。「クッテで紹介したいから」と、会員である友人に誘われて入った当会の新参加者が、おこがましくもお引き受けさせて頂いたこの企画。読んで下さる皆様にそっと寄り添うBGMになれば幸せだ。

スイスと日本、人生と音楽。私達にとって切っても切れない絆をテーマに綴っていくこの連載、第一回目は、イタリア人の両親のもとにスイスで生まれ、日本でも沢山のファンに愛されながら、音楽に生きて、人生の半ばで神様に召されてしまったサルヴァトーレ・リチートラに想いを馳せたいと思う。

1968年8月10日ベルンで生まれたリチートラは、約2年ほどしかスイスに住んではいないものの、チューリヒ歌劇場、ベルンなど、スイスで歌う機会が多く、スイスで生まれたことを誇りに思っていたようだ。

両親と共にイタリアに戻り成長したリチートラは、初めはグラフィック・デザイナーとして働いていたが、母親の勧めもあり、歌を習い始める。最初の先生は、彼の天性の声を支える技術を全く教えられなかったと言われている。その後、現在も健在なテノールの中で最も偉大だと言っても過言ではないカルロ・ベルゴンツィと出会い、30過ぎてデビューを飾る。

実はベルゴンツィは、彼をもっと手元に置いて勉強させたいと思っていたそうだ。しかし、デビューまでの長い道のりを取り戻そうとしているかのように、スターダムに駆け上る速さは目を見張るほどであった。

筆者が初めて彼に会ったのは、1999年の夏だった。ヴェローナ野外劇場近くの小道に面するレストランで昼食をとっていた時、知り合いのソプラノ歌手が通りかかり、一緒にいた彼を紹介してくれた。人懐っこい笑顔で「チャオ！僕、サルヴァトーレ」といきなりファーストネームで自己紹介した彼は、どこにでもいる普通のおちゃめなイタリア人だったので、『蝶々夫人』のピンカートン役を歌うためにヴェローナに滞在していると聞いた時には、誇張ではなく、椅子ごとひっくり返りそうになった。それほど、よい意味で“庶民的”だったのである。それはいつでも会っても生涯変わらなかった。

それからの彼は、順風満帆にキャリアを積み重ねていった。しかし、彼がテクニク不足に苦しみながら努力を重ねていたことも、私は知っている。また、ほとんどのテノールが陥る、“自分の現在の声よりも重い役を歌う”がための苦悩もあった。『ト

スカ』『エルナーニ』『アンドレア・シェニエ』『カヴァレリア・ルスティカーナ』『アイダ』など、彼が歌ういろいろなオペラを聴いた。手に汗握りながら、無事に歌い終わられるように祈ったり、また別の機会には、彼の声を骨の髄まで堪能したりしたが、毎回言える事は、彼は常に一所懸命だった。健康なほど全力投球していた。

今年の夏休み前に、ドイツのテレビで古いイタリア特集を再放送していた。有名な料理人のイタリア料理に関する蘊蓄と、その地方で催されていた声楽コンクールの模様が映され、ファイナリストの中に、デビュー前のリチートラが混ざっていた！まだまだ体中を力ませながら歌う、1人のコンクール出場者としての“サルヴァトーレ”が、食事の席で誰かに望まれてカンツォーネを歌うシーンでは、当時も今も変わっていない彼の人柄と歌への情熱がほとばしっていた。「もしもリチートラが故人だったら、この映像は掘り出し物になるだろうな」と、不吉な考えが脳裏を一瞬かすめたが、「今度会ったら、このテレビ番組の話をしてからかってやろう」と、笑いながら打ち消した矢先のことだった……。

ボローニャ歌劇場来日公演を直前に控えていた今年の8月27日、彼の故郷であるシチリアで、リチートラはスクーター事故を起こした。ヘルメット無装着だったためもあり、事故直後から意識不明状態にあった。私はその知らせを聞いたのは事故から2日後のことだったが、あまりのショックに、毎日彼の事が頭から離れなかった。音楽関係者の話では、恐ろしいスピードでカーブを曲がろうとし、曲がりきれずに壁に激突したという。あまりにも不可解な事故なため、運転中に脳溢血などを起こしたのではないかと考える人もいる。後ろには数年付き合っていた中国人歌手の彼女を乗せていたが、ヘルメットを被っていたため、軽症で済んだそうだ。私はとっさに確信した。あのサルヴァトーレなら、自分のヘルメットを彼女に貸してあげるに決まっている。結局、意識が戻らず脳死と診断され、遺族は損傷がなかった臓器を提供する決断をした。やはり、あんな彼を育てたご両親らしい。彼の臓器が、2人の若者の中で生き続け、彼の

の声は私達ファン全ての心の中で生き続けるのだ。

彼が世界に名を馳せたのは、2002年ニューヨークのメトロポリタン歌劇場で、開演2時間前にパヴァロッティの代役を引き受け、『トスカ』を歌い当劇場にデビューした事件であった。このオペラの第三幕に、「処刑まで残り1時間」と言い渡されて、この世に残していく恋人トスカを想い、「こんなに人生を愛おしく思ったことはなかった」と熱唱する、カヴァラドッシのアリア『星は光りぬ』がある。実際の彼も、こんな風に恋人を想いながらこの世を後にしたのだろうか、と考えながらこのアリアを聴くと、彼らと同じように、今、生きているということが慈しめるはずだ。もしも生きる事に多少疲れている人がいたら、下記の処方箋をお試しいただきたい。

音楽の処方箋

文/中東生



第1回 生きる ～サルヴァトーレ・リチートラ～

ブッチーニ作曲 歌劇『トスカ』第三幕
カヴァラドッシ (テノール) のアリア『星は光りぬ』
歌唱 サルヴァトーレ・リチートラ

Giacomo Puccini "Tosca" Aria di Cavaradossi (Tenor)
"E lucevan le stelle" Salvatore Licitola